

## 忘れえぬ言葉忘れえぬ人（1）

こんどの緒方町長選挙はきびしかった。友人の現職町長が敗れた。助役の高倉氏に電話で今後をおたずねした。「私は仕えてきた波多野町長から退職辞令を頂くつもりです」。いまだよい言葉。任期半ばでの美しい進退。

つぎは私事で恐縮。緒方町の任運荘で宿直中激痛で倒れる。隣の緒方病院の応急手当で助かり、翌日ピーポーピーポーで医大病院へ急送。車中若い国広医師と看護婦がつきつきりの処置で無事医大着。病室には複雑な機具と白衣の人たちが待ち受けていた。「ここまで来ればもう大丈夫です」といつて立ち去る国広さんの声までは覚えていた。

どれぐらいたっただろうか、耳もとで声がする。「吉田さん、もう大丈夫ですよ。私は受け持ち医の中川です」。医師の自己紹介を聞くのは生まれて初めてなので、驚いてうす目を明けると、若い美しいひとみがそこにあった。若くても医の心がたしかにある、意識混濁こんだくの中にもそう固く信じられた。

超音波で写るわが心臓の動きを中川医師と共に見続ける。心臓は重体を知っているかのように必死に動いている。ひん死のチョウの羽ばたきそっくりだ。「いとしいですね。かわいそうですね。美しいですね。いじらしいですね」。わが心臓に感動しつついつのまにか多弁になっていた。

一カ月で退院。若き女医にお礼をのべると、「緒方病院の早期治療のおかげですよ」と。緒方病院の国広さんにお礼を言うと、「私ではない。この加藤看護婦のおかげです。あなたの様子がおかしいので自分で心電図をとって、非番の私に見せに来たから、心筋コウソクが発見されたのです。ここには優秀な看護婦たちがいますよ」。若い善意の巧まざるリレーが私を救っていたのである。

(一九八五年三月六日)